

第32回 福島県建築文化賞 各作品賞 講評

正賞(1作品)

矢吹町立矢吹中学校(矢吹町)

高低差の大きな敷地に、地盤レベルの異なる既存の食堂や勤労者体育館を組み入れ、仮設校舎を用いずに建て替えることが求められた。この困難な条件のもと、自然の丘や樹木を活かして人々を迎え入れる豊かなアプローチ空間や屋外環境を整え、中庭の野外劇場や2層から構成される図書館など、のびのびと過ごせる学校を創り出している。

一直線の廊下が普通の中学校において、変化のある廊下や教室まわりの空間を実現し、家具やロッカースペースを備えた教室や開放的な特別教室、中庭を介して学校全体の動きが把握でき一体感のある空間構成、地域材を活用した内装や造作・家具によるあたたかみのある内部空間など、学校建築の課題に幅広く応えている。幅広い関係者の長期間にわたる検討、生徒のデザインによる特別教室のサイン、職員や地域の人たちも参加した外壁のタイル張り等、協働の学校づくりが結実し、多くの人々の思いが込められていることが実感できる。

こうした学校に対する誇りとゆとりある空間が、生徒たちの生き生きとした活動を生み出しており、子どもたちの成長と地域を支え続けていく学校づくりの本質を実現していることは高く評価できる。

準賞(1作品)

菊池眼科(郡山市)

建築主の、地域医療の提供を通して東日本大震災からの復興に貢献したいという願い、「たくましさ、力強さを持った建築でありたい」という建築デザインに対する強い思いが、信頼に意欲的に応えようとした設計者の手により揺るぎない建築として実現されている。

大きな開口を持つ直方体の外観はシンプルで力強く、存在感を示している。開口面からは吹き抜け空間のラウンジの光景が、一幅の絵画のように街なみに向けて表現されている。

また、待合室、診察室、手術室などの構成諸室は、回遊動線により機能的に配置され、建築主のアイディアに呼応して、従来のクリニックの概念を破りシンプルに統一され、選ばれた家具と共に質感の高い空間にデザインされている。施工者もよく応え、打ち放しコンクリートやディテールに至るまで、建築技術の高さが感じられる。

優秀賞(3作品)

○ 二本松市立 とうわこども園(二本松市)

地域材を活用し、柔らかな曲線からなる木造空間が丸柱を生かして巧みに構成され、あたたかみに溢れた子どものための世界が生み出されている。

900年の歴史を持ち、日本三大旗祭の1つとされる木幡の旗祭の色彩をモチーフとしたガラスブロックを組み込んだ格子壁、登園する子どもたちの期待感を高めるアプローチのキャノピーなどから、郷土愛を育もうとする気持ちが伝わってくる。

地域材の活用に積極的に取り組み、東日本大震災による困難を乗り越えて実現した設計者とそれに応えた施工者の努力は高く評価できる。

○ アルテマイスター保志 (会津若松市)

新たな祈りの場の創出を目指して様々な分野の専門家が結集し、仏壇仏具店の固定概念を払拭した1つの作品を創り出した。

街なみに開き、建物への誘導、内部動線の回遊性を図るとともに、エントランスホールの水盤と壁に揺らめく光、華やかな彩りを放つ花鳥風月の天井画、金箔の列柱など様々な仕掛けを盛り込み、高い空間性を持たせている。

仏壇、神棚などの展示品の特性と展示棚等のデザインが相まって独自の雰囲気を醸し出し、単に効果的な展示空間としてだけでなく、人の目を惹く建築作品となっている。

○ かなや幼稚園(いわき市)

福島第一原子力発電所の事故以降、外遊びができなくなった園児のために、安全と成長を両立させた『汗のかける幼稚園』をテーマに建設された。

膜屋根による中央ホールは、回遊できるギャラリーが巡り、屋内化された園庭として程よいスケール感を持つ。光や音など自然が感じられ、木造の暖かみに溢れた居心地の良い空間となっており、設置された滑り台や家具、サインに至るまで、随所に様々なアイデアがうかがえる。

東日本大震災の影響を乗り越え、子どもを思いきり遊ばせたいという建築主の願いに応じて、子どものための豊かな小宇宙を創り上げていることは高く評価できる。

特別部門賞(3作品)

○ IDCフロンティア 福島白河データセンター(白河市)

立地する白河の気候特性を活かして、外気導入による空調を行い、明確な目標設定の下、徹底してエネルギー消費の効率化を図っている。

平面計画と断面構成により建築と設備を融合し、全体が言わば空調機とも言えるような建築であるが、外気導入のためのフィルターや騒音制御のためのルーバーをアール形状とすることで、自然景観に対して柔らかな表現となるよう外観のデザインに生かすとともに、高度情報化社会を支える建物として存在感を際立たせている。機能的に必要な技術要素を景観デザインに活かしている点は評価できる。

○ 会津坂下町 気多宮 街なみ交流センター(会津坂下町)

元は明治35年に建造された土蔵であり、東日本大震災により甚大な被害を受け、解体の危機に瀕した。地元住民の要望を受け、所有者から寄贈を受けた町が、この歴史ある蔵を地域住民の憩いの場として再生した。本来、閉鎖的な蔵が開放感のある活動空間、集まりの場に見事に生まれ変わり、他の蔵を含めた建築群が街道沿いの景観を高め、歴史的な街なみの保全に繋がっている。

地域の人々の思いを受け止めた設計者と地元職人の経験と知恵と技術が結集され、伝統建築物を守るだけでなく、地域の核としての新たな役割を生み出している。

○ 喜多方市 地域・家庭医療センター「ほっと☆きらり」(喜多方市)

県内初の家庭医療センターであり、地域医療者の研修の場としても活用される。過疎地域の医療課題に対応するため、新たな構想の下に建設され、建築主や医師などの関係者と十分に協議し合って計画されている。

機能的に諸室が配置され、来院者に対して優しく、気軽に利用できるような温かみのある待合空間が印象的である。同様な問題を抱える県内各地に普及し、地域を支えていく施設の在り方について今後の範となることが期待される。

復興賞(3作品)

○ 桜の聖母学院幼稚園園舎(福島市)

築50年の旧園舎が東日本大震災によって半壊し、放射能問題も重なる中、園児の安全・安心を第一優先にしながら再建したいという建築主の思いが具現化された。

外部で安心して遊べない状況に対し、将来のクラス数の回復に備えた保育室スペースを、屋内で砂遊びなどができる「なかよし広場」として設け、地域の未就園児にも解放し、安心できる子育て空間を提供していることは高く評価できる。

「なかよし広場」で遊ぶ子どもたちの光景から、将来、大勢の園児が外庭で元気に遊び回る姿が目に見えよう。

○ 飯坂温泉「なかむらや旅館」(福島市)

本建物は、飯坂温泉街の景観上、要となる位置にあって象徴的な存在であり、明治期からの生活様式と建築文化を今日に伝える文化財的価値を有する。

東日本大震災により甚大な被害を受け、一時は廃業の危機もあったというが、由緒ある建物を愛する人々、顧客の応援を受け、建築主の強い決意と使命感をもって復旧された。建築文化の継承の取組として高く評価できる。設計者は元の風情を壊さぬように留意しながら補強、修繕策を探ると共に、新しい生命を吹き込み、施工者の工夫によって甦った。建築の再生に止まらず、温泉街の復興を印象づける上でも大きな役割を果たしている。

○ 日本全薬工業株式会社 研修管理棟(郡山市)

東日本大震災後、移転も検討の視野に入中、地域に根差してきた企業として、その歴史と姿勢を大事にしようと、現地での業務の継続と建て替えを決断したものである。地域と共に復興に向かおうとする建築主の姿勢をまず評価したい。

緑豊かな自然環境に恵まれた高低差のある地形を活かし、多様な建築ポキャブラリーを用いて豊かな空間を構成し、質感の高い空間を創り出した。

太陽光や風力などの自然エネルギーを積極的に活用して環境との共生を図り、次世代を見据えた新たな建築を実現している。

(※優秀賞、特別部門賞、復興賞については順不同)